

大学における地域完結型の看護実習教育プログラムへの提案 新型コロナウイルス感染症対策下の3年間の総合看護実習の 経験を基にして

Proposal for A Community-Based Nursing Practice Education Program in College Education Based on Three Years of The Experience of Comprehensive Nursing Training Under The New Coronavirus Infection Countermeasures

増永悦子¹ 馬場美穂¹ 小澤直樹¹ 小野寺美佳¹ 安藤詳子¹
Etsuko Masunaga, Miho Baba, Naoki Ozawa, Mika Onodera, Shoko Ando

要旨

本学は1971年の開学以来、一貫して地域貢献に資する看護師の育成に取り組み、筆者らが担当する療養生活支援看護学領域においても、従来の病院完結型から対象者の療養生活の場を含む地域完結型の看護を目指して、講義・演習・実習教育に取り組んできた。今回、新型コロナウイルス感染症対策下での3年間（2020年～2022年）で、領域の総合看護実習で取り組んだ地域完結型の実習教育プログラム作成のプロセスと実習教育プログラム内容を、「1）実習施設の選定と実習方法」「2）臨床講義」「3）地区踏査」の3点に焦点を絞り紹介する。特に代替実習時に学校・病院と連携・協同して事例の設定をしたことにより、病院担当者の来校時の助言やカンファレンス参加等で、学生は現実感や実在感が増したと推測された。実習施設と協同して取り組んだ、感染症対策下での実習教育プログラムの作成と、その教育実践経験を基に、次年度以降の本領域での総合看護実習への提案を述べる。

キーワード

地域完結型、看護実習教育プログラム、新型コロナウイルス感染症、実習施設との連携・協同、大学教育

I はじめに

一宮研伸大学（以下、本学）は、その前身の看護専門学校が1971年に開学後に、2004年に短期大学へと移行し、2017年に大学を開設して現在に至るまで、約半世紀の看護教育の歴史を有している。本学は開学以来、一貫して地域貢献に資する看護師の育成に取り組んできた（一宮研伸大学看護学部/歴史・沿革、2021）。現在の大学のディプロマポリシーの中にも「地域の特性を理解したうえで、地域に貢献する活動を志向する」を掲げて、地域に資する看護師の育成を目標の一つにしている。

筆者らが担当する療養生活支援看護学領域（以

下、本領域）は、「人生で最も長期間であり、社会的役割・課題も変化する期間」の発達段階にある成人期の人を主に対象とする。そして、「対象者が主に生活する地域を基盤に、病と共に生きる人と家族が、療養の場が変化しても自らの健康課題に取り組める看護」を教授してきた。（一宮研伸大学看護学部/デジタルパンフレット、2023, p. 14）、すなわち、従来の病院完結型から、対象者の療養生活の場を含む地域完結型の看護を目指して、講義・演習・実習の教育に取り組んできた。

しかし、2019年末から新型コロナウイルス感染症（以下、感染症）の世界的流行の影響を受けて、

¹ 一宮研伸大学 看護学部看護学科 療養生活支援看護学

正規授業（講義・演習・実習）も、制限された条件下で継続する状態となり、特に看護学実習（以下、実習）は臨地では困難となった。こうした状況下でも、領域内の教員間で、そして、実習施設の担当者とも話し合いを重ねて、実習教育プログラムを再検討し、地域完結型実習に取り組んだ。

本稿では感染症対策下での 2020 年から 2022 年の 3 年間で本領域の総合看護実習で取り組んだ地域完結型の実習教育プログラム作成のプロセスと、その実習教育プログラムを紹介する。その教育実践経験を基に新カリキュラムでの本領域での総合看護実習への提案を、まとめとして最後に述べる。

II 本学での総合看護実習、及び、療養生活支援看護学領域での総合看護実習

まず、本学での総合看護実習、及び、本領域での総合看護実習の概要を以下に述べる。

1. 本学の総合看護実習

本学の総合看護実習は、4 学年次生の後期に実施する、看護学部での最終の実習である。本学の総合看護実習（以下、本実習）は、本実習 2 単位と在宅看護実習（指定規制の科目名は在宅看護論実習）1 単位、合計 3 単位で構成している。実習単位の構成上、在宅看護学を踏まえた地域完結型の実習目標を有する。

すなわち、対象者を「地域や在宅で生活する人とその家族」として、それらの対象者の「健康課題を総合的」に捉えて、必要な看護計画を立案し実施することを目指す。また「保健・医療・福祉関係者との連携や資源の活用、看護マネジメント、相談、教育、調整等も必要に応じて計画して実施し、評価」を目指す。そして、「地域包括ケアシステム」において、「医療機関における入院生活から在宅や地域の施設への移行、又は在宅から医療機関への移行において必要な看護を提供する。」ことも目指している。

本実習は本学の看護専門領域の全教員が担当し、上述した共通の実習目標の下、各領域の特性を生かした実習を実施している。

2. 療養生活支援看護学領域での総合看護実習

本領域は成人看護学（慢性期）と在宅看護学の

教員が所属し、病院（病棟・外来）、訪問看護ステーション、地域包括支援センター等の何れか（または複数）の臨床経験をもつ教員で構成しているのが特徴である。開学以来、領域の教員らと検討を重ねて、成人看護学（慢性期）と在宅看護学を融合して療養生活支援看護学とし、本領域の科目（講義・演習・実習）を構成し教授してきた。講義・演習では、対象者を生活者として捉えることや、本来の療養生活の場である地域の理解、健康レベルの変化によっては療養の場が変わることを強調している。

例えば、慢性疾患をもつ人と家族への看護過程の展開の演習では、急性増悪し入院した 1 事例（以下、入院事例）と、入院中に発症した課題をもち在宅療養する 1 事例（以下、在宅事例）を設定した。入院事例は、発症前から現在に至る経過と、入院前の療養生活の状況を動画で視聴し、病みの軌跡理論を用いて対象者の理解の促進に努めている。また、計画立案時には、対象者のセルフマネジメント能力獲得に資するように、退院後の療養生活に繋がる計画立案を目指し指導している。

在宅事例では、対象者がもつフォーマル及びインフォーマルなソーシャルサポートネットワークや、社会資源の利用状況の把握のために、エコマップを用いた演習を実施している。この演習では、対象者のもつ資源を具体的に可視化することで、地域包括ケアシステムの理解の促進にも努めている。そして、在宅事例は脳梗塞の再発を繰り返す事例を選択し、健康レベルの変化で療養の場が変化することも強調している。

本領域の本実習目標も共通の実習目標を基に立案した。本領域の特性を生かし対象の発達段階は成人期以降とし、健康課題は講義・演習で取り上げた慢性疾患（糖尿病や慢性腎臓病、がんに代表される生活習慣病を含む）で退院後もセルフマネジメントが必要な療養生活者とした。

さらに、2022 年導入の新カリキュラムを見据えて、新カリキュラムで重要とされた防災看護について、対象者の療養地域の災害リスクを多重課題として、それを踏まえた看護過程の展開を実習内

容に取り入れた。また対象者の住む地域の社会・文化等の地域特性の理解のために、対象地域の地区踏査も実習内容に含めて入れた。

Ⅲ 地域完結型の実習教育プログラム作成のプロセスと実習教育プログラム内容

本項では感染症対策の前・後に分けて、実習教育プログラム（以下、プログラム）作成プロセスとその内容を紹介する。この項は、次の３点－すなわち、1) 実習施設の選定と実習方法、2) 臨床講義、3) 地区踏査について、以下に述べる。

1. 感染症対策前の実習教育プログラム作成のプロセスとプログラム内容

1) 実習施設の選定と実習方法

本学及び領域での実習目標に合致する実習施設を検討した。例年 15 名前後の学生が 3 グループに分かれて実習することを申し入れた。

看護過程の展開を主に実習する実習施設（以下、病院）は、地域連携室や訪問看護、地域包括ケア病床や回復期リハビリテーション病棟を有する、地域包括医療・ケア認定施設の指定の一宮市内の 1 病院を選定した。

防災看護を実習する実習施設（以下、大学施設）は、災害の中でも、今後、この地域で発生が予測される自然災害を学習できる愛知県内の大学が有する 1 施設を選定した。なお、この施設は看護師資格をもつ教職員が不在のため、看護師資格をもつ領域全教員の何れかが実習中に同行することとした。

上記 2 つの実習施設に領域教員と赴き、本実習及び領域の実習目的・目標を説明して了解を得た。病院との打ち合わせ時は、特に受け持ち患者の条件を質問されて、前述の対象患者の条件を説明し理解を得た。また、病院が有する地域連携室や訪問看護、外来・病棟との連携も提案されて、実習内容に計画することにした。

大学施設の窓口担当者との打ち合わせ時には、実習時の講義担当者を相談された。看護は人を対象とする学問であるため、災害時の人間行動や看護師・助産師による被災者支援の研究業績がある教員を紹介されて、講義担当を依頼した。

2) 臨床講義

実習に選定した 2 施設と実習内容を話し合い、次の臨床講義を実習時に実施することを計画した。

(1) 看護過程の展開の主な実習施設（病院）

・看護管理：（担当：看護教育担当師長）

講義内容：実習施設のオリエンテーションと、災害発生時の看護師長の役割と葛藤について。

・看護管理：（担当：院内の防災委員の看護師長）
講義内容：防災看護の基礎知識と病院内での防災看護活動や看護管理の実際。

(2) 防災看護の実習施設（大学施設）

・防災看護：（担当：施設の地震学の研究者）

講義内容：関東大震災を手掛かりに、災害発生時の被災者状況と被災者支援の実態、看護師・助産師の活動状況、今後の防災システムの課題。

3) 地区踏査（ちくとうさ）

地区踏査とは「簡単で便利な情報収集方法」であり、「対象地域に行き事前に収集した情報だけに頼らず、実際にそこで生活する人々の日常を観察し実感する」のが重要とされる（標，2016，p. 110）。学生の実習前に、実習方法のオリエンテーションと、荒賀ら（2017，p. 106）の地区踏査のアセスメントツールを基に、小講義を領域教員が分担して実施した。学生達は一宮市の社会・文化的特徴や、対象患者・家族の住む地域の自然災害の危険性を、グループ学習で事前準備して地区踏査に臨むことにした。事前学習及び地区踏査後に得た情報を病院でまとめて、病院担当者らも参加の発表会を計画した。

2. 感染症対策後の実習教育プログラム作成のプロセスとプログラム内容

ここでも、次の３点－すなわち、1) 実習施設の選定と実習方法、2) 臨床講義、3) 地区踏査について、以下に述べる。

1) 実習施設の選定と実習方法

感染症の影響で 2 施設共に臨地実習は中止になったため、代替案の実習方法を相談した内容を各実習施設別に述べる。なお翌年度以降も感染症対策下での実習が継続し、同様の実習方法で実習した。

■ 資料：新型コロナウイルス感染症対策下での総合看護実習の実習状況

■ 地区踏査時の様子（2020年度 総合看護実習 1期生が撮影）



* 受け持ち患者の居住地域の避難場所の確認

■ 学内発表時の様子（2020年度 総合看護実習 1期生）



* 学生全員がマスク着用

(1) 看護過程の展開の主な実習施設（病院）

臨地実習が困難になり、看護過程展開時の患者・家族の設定を病院の教育担当師長や臨地実習指導者等担当者（以下、担当者）と相談した。臨地実習時の対象患者・家族の候補予定者を挙げてもらい、入院及び訪問看護も利用する 2 型糖尿病患者と家族を選定した。また担当者と相談し、災害リスクの想定地域に架空住所を設定し、さらに、地域の社会・文化的特徴（繊維業、織姫神社、等）を踏まえて対象の設定をした。なお領域教員が病院に赴き、個人情報保護を厳守して、事例の情報収集を分担しまとめた。

学生（15 名前後）は 3 グループに分かれて実習した。同一事例をグループで受けもつが、情報整理・アセスメントと統合までは個人ワークとした。担当者と共に設定した事例だったため、担当者の来校時に、学生は追加情報や計画の助言を得ることができた。最終カンファレンスは担当者の参加（対面または WEB : Zoom）を得て実施できた。

(2) 防災看護の実習施設（大学施設）

臨地での実習が中止となり、臨床講義の予定時間を延長し学内で実施した。また領域教員らの防災看護の経験（災害派遣、高齢者独居家族の事例等）を基にした講義・演習を計画し実施した。

2) 臨床講義

臨地実習時間内に予定した臨床講義を、全て学内に変更した。特に防災看護の講義は参加希望もあり、他領域の学生・教員も参加した。また、他領域の臨床講義で学内に変更した講義も、参加可能時は本領域学生も参加した。なお、翌年度以降も感染症対策下での実習が継続したため、総合看護実習の第 1 週目に、これらの臨床講義を学内の実習委員会が日程調整して計画し、各看護専門領域の参加の便宜が図られた。

3) 地区踏査

学生は小グループに分かれ、スタンダードプリコーションを含む感染対策を十分に取り、対象患者・家族の居住地域を中心に地区踏査の実習をした。当初予定した病院での実習記録のまとめや発表会は全て学内に変更した。病院担当者が学内で

の講義実施時に発表会を実施し、地域の具体的な災害リスクや情報提供等のフィードバックを得た。

IV まとめ

地域完結型医療・ケアについて牛久保(2019, p.2)は、「時々（まれに）入院、ほぼ在宅」を目指し、「地域全体があたかも 1 つの医療機関として考える」医療・ケアであり、「少子高齢化、多死社会」の現状で病院完結型医療・ケアから地域完結型医療・ケアへパラダイム・シフトしたと述べている。

そして、地域完結型医療・ケアにおける看護教育に求められるのは、「看護の対象者を患者ではなく『地域の生活者』としてとらえること」「長い療養経過の中で『入院前』『入院中』『退院後』の生活を考え、日常生活がなるべく分断されないようにすること」「多職種連携を駆使して医療やケア、対象者の生き方や思いをつないでいくこと」「臨床看護学と地域看護学を融合した力を養成すること」、以上の 4 点を挙げている（牛久保, 2019, p. 12）。

上述した看護教育の必要性を鑑み、本領域では成人看護学（慢性期）と在宅看護学を融合した療養生活支援看護学として、本領域の科目（講義・演習・実習）に取り組んできた。本領域の総合看護実習も地域完結型の実習プログラム作成を計画した。

具体的には対象者の選択条件で、健康課題は慢性疾患を有し、退院後もセルフマネジメントが必要な療養生活者を設定したため、入院だけでなく、退院後に外来通院や訪問看護を利用する療養生活者を対象に選定することを、病院担当者と相談した。また、病院担当者からも、病院が有する地域連携室や訪問看護、外来・病棟との連携も提案された。このことは、感染症対策下で、臨地実習を代替実習に変更した時にも活用され、学校・病院と連携・協同した事例の設定に繋がった。

北村・堀（2022）は、紙上事例等を用いたことで対象や家族の理解、社会的影響の理解には限界があるとし、臨地実習と比較し実習満足度も低下したと述べている。しかし、本実習では代替実習時の事例を、病院担当者の選定した候補者から設定したことで、担当者の来校時に学生は追加情報や計画の助言を得ることができて、事例の現実感や

実在感が増したと推測された。

カンファレンス実施には、病院担当者と事前に相談し、対面だけでなく WEB (ZOOM) を用いて実施した。WEB でのカンファレンスは、病院担当者の便宜を図ると共に、カンファレンスとしても効果的だった。ただし、双方の IT 環境の確認や事前準備が必要となった。兼田 (2022) は、WEB 実習の準備に時間を要すると指摘しており、今回の経験でも、同様であった。さらに、事例の準備においても、実習施設との調整や事例作成に時間を要したことは課題だった。今後、同様の方法での事例設定やカンファレンス実施時には、さらなる検討が必要と考える。

感染症対策下での成人看護学実習及び在宅看護学実習について北村・堀 (2022) は、臨地実習で学ぶ意義を認めつつも、「教材や実習の進め方の工夫により、学内実習においても臨地実習に近づける学びができる。」と述べて、学生の新たな気付きや主体的学習に繋がると指摘している。本実習における看護過程の展開で、個人ワークとした段階でも、病態や薬物療法についてはグループで分担して学習可能とした。その結果、グループダイナミクスが働き、それらの協同だけでなく、計画立案時も積極的にグループで協力して取り組んでいた。そして、地区踏査では 3 グループに分かれて実習したが、各々の地区踏査の目的や対象地域に重なりがないかを、グループ間で調整して実習していた。学生たちが主体的に実習に臨み、かつ効果的なグループ学習が可能となった要因の検討については、今後の課題と考える。

また、臨床講義においては、他領域で計画された講義への参加については、本領域の実習の目的との繋がりを事前に丁寧に説明する必要性が課題として残った。

本年の 5 月に感染症は 2 類相当から 5 類へと変更になった。しかし、医療・福祉機関においては、現段階でも 2 類相当に準じた感染対策が取られている状況もある。今回の経験で得た有効な実習方法や課題を踏まえて、次年度以降も本領域での地域完結型実習を促進し新カリキュラムの実習に備

えたい。

謝辞

本学の開設当初から、特に新型コロナウイルス感染症対策下においても、本領域での本実習の実現のために、関係する実習施設担当者から多大な協力を得た。一宮市立木曽川市民病院看護局の前田雅代看護局長はじめ看護局の皆様、臨地実習担当の看護師の皆様、名古屋大学滅災連携研究センターの武村雅之教授、末松憲子研究員はじめセンターの皆様に、紙上をもって謝意を表する次第である。

最後に、本領域の地域完結型実習を推進された本学 (元) 副学長の溝口満子教授、初期の実習プログラムに携わった吉田ひとみ (元) 助教にも、紙上をもって謝意を表する次第である。

利益相反

本報告での利益相反は存在しない。

文献

- 荒賀直子, 後閑容子, 鳩野洋子, 神庭純子 (2017) 公衆衛生看護学, インターメディカ, 4 (4)
- 一宮研伸大学看護学部 URL サイト (2021 発表), 一宮研伸大学について/歴史・沿革, <https://www.ikc.ac.jp/about/history.html> [2023/9/2 閲覧]
- 一宮研伸大学看護学部 URL サイト (2021 発表), オープンキャンパス /デジタルパンフレット, https://www.ikc.ac.jp/opencamp.us/pdf/pamphlet_2024.pdf [2023/9/2 閲覧]
- 兼田啓子 (2022) 文献検討による新型コロナウイルス感染拡大下における在宅看護実習, インターナショナルナーシング, pp29-36, 21 (4)
- 北村真由美, 堀美保 (2022) コロナ禍における成人看護学実習の代替実習に関する文献的分析, 日本医療情報学会看護学術大会論文集, pp219-222, 23
- 標美奈子編集 (2016) 公衆衛生看護学概論, 4 (3), 医学書院
- 牛久保美津子編 (2019), 地域完結型看護を目指した看護教育-地域包括ケア時代の実習指導, メジカルフレンド社, 1 (1)